



市議会議員
上田由美子
☎ 68-2106
Fax 68-2146



前市議会議員
砂田喜昭



前参議院議員
たけだ良介

上田由美子の決算特別委報告

小矢部市議会では、10月17～19日、決算特別委員会が開かれ、2021年度の決算について市役所の各課長から報告を受け審議しました。

私は、一般会計の教育費の中で、小学校の31人以上のクラスに配置される多人数学級支援講師事業について質問しました。

2021年度は1クラスに講師1名配置され、費用は166万円でした。22年度はこの事業が廃止され、予算は組まれていません。

私が、制度が続いていけば今年度配置されたのは何クラスかと聞いたところ、教育総務課長は、石動小学校2クラス、津沢小学校2クラス計4クラスと答えました。

発達障害や肢体不自由の児童を支援するスタディメイトは、21年度24名、2010万円支出されました(一人平均84万円弱)。22年度は26名で2376万円の予算です(一人平均91万円弱)。他市に比べてこれだけ多数のスタディメイトを配置しているのは小矢部市の一人ひとりを大切にしようとする姿勢の現れだと思います。

私は、「多人数学級支援講師は、授業に必要な教材を作り提出物を確認するなど担任の支援ができるので、児童の学習内容習得のために31人以上のクラスにぜひ配置する必要がある」、「スタディメイトは特定の児童を支援することを目的としたもので、役割は違っており多人数学級支援講師の代わりはできない」と指摘しました。

しかし、教育総務課長は、多人数学級支援講師とスタディメイトは役割が違うが、多人数学級の支援はスタディメイトで対応していきたいと答えました。

やはり多人数学級支援講師は必要

解説 多人数学級支援講師

小矢部市が独自に配置してきた多人数学級支援講師とは、教員免許を持つ人が担任の授業を支援する職種です。本来は早く30人以下の学級にすることを目指されているのに、国も県もなかなか実施しません。そこで市が2003年度、小学1年生31人以上のクラスに独自に配置し、その後対象学年を小学3年生まで引上げてきたものです。30人以下の学級を早く実現させるために、小矢部市が永年やってきたよい芽を摘んでしまうのはよくありません。

授業の支援ができる多人数学級支援講師

多人数学級支援講師は、校外学習の付き添いができます。また、担任が出張や年休取得で不在の時は、担任に代わって授業や給食指導、保護者への対応が切な仕事です。



スタディメイトの任務は児童の日常生活支援で、勤務日数も少ない

スタディメイトは教員免許資格が必要なく、支援の対象は発達障害児や肢体不自由児童です。今年度から多人数学級支援講師の配置を廃止して、代わりにスタディメイトによる対応としました。そのため、小学校の1年生から3年生までの31人以上の4学級には、教員の有資格者4名のスタディメイトを配置しています。勤務日数は、スタディメイトが週3日、年間113日ですが、多人数学級支援講師は週5日、年間200日と、大きな違いがあります。しかもスタディメイトは、主に児童の日常生活の支援であり、担任に代わって丸つけとか授業の教材準備などは原則できません。

有機・無農薬農産物で学校給食を

有機・無農薬栽培の農産物を使った学校給食を普及しようとして、「全国オーガニック給食フォーラム」が10月26日、東京都中野区で開かれ、オンラインを含め40余りの市町村長や約4千人(実出席千人)が参加しました。韓国では全耕地面積の5%(8万1720ヘクタール)が有機・無農薬栽培なのに、日本では全耕地面積の0.6%(2万5200ヘクタール)に過ぎません(日本農業新聞10月26日付)。

小矢部市でも

「食の安全を守る人々」上映運動

日本でも有機・無農薬栽培の農産物を学校給食に提供している自治体は123市町村で、オーガニック給食を普及しようという取り組みが始まりました。

小矢部市でも映画「食の安全を守る人々」の上映運動を通じて有機・無農薬栽培を普及しようとして、取り組んでいます。農民連小矢部支部や新日本婦人の会小矢部支部の皆さんです。29日に農民連小矢部支部は若林公民館で全国の取り組みを学びました。

学校給食で有機・無農薬の農業普及を

外国産小麦を使った学校給食パンから発がん性物質・グリホサート系農薬が検出されています。殺虫剤からはネオニコチノイド系農薬が脳神経の発達がかんたんな子ども達に悪影響を及ぼしているといわれ、EUでは使用禁止となっています。こうしたことから学校給食には、パンに国産小麦や有機食材を使うしてほしいという声が出ています。



千葉県のすみ市では全国初に、市立13の小中学校で100%有機米へ切り替え、子ども達に喜ばれています。問題は除草剤を使わない農業をどうやるのか、市の熱心な担当者が農家と協力して代掻きを2回行うとか、深水栽培など手間をかけた農業に取り組んできました。このコメを学校給食に使って消費をふやし、さらに割高のコメに市が補助をしています。コウフトリが戻ってくる取り組みをした兵庫県豊岡市の経験からも学んだそうです。

市内でも減農薬で栽培する特別栽培米(節減対象農薬や化学肥料を慣行レベルの50%以下で栽培したコメ)を学校給食に使用して欲しいとの要望が出されています。学校給食に提供することで、特別栽培米を作付けする農家を増やし、おいしくて安心安全な食料を提供することができそうです。

新潟県新発田市で、家庭から出た生ごみを集めて3ヵ月ほどかけて有機肥料をつくり、農地に還元する取り組みをしていることがビデオで紹介されました。市内でも生ごみをコンポストで有機肥料にし、おいしい野菜作りをしている経験も話されました。循環型農業の取り組みでは、小矢部市も稲葉山牧野の牛糞を水田に還元したり、鶏糞を土づくり資材として農地に散布することに補助金を出したりしています。

こうした経験を生かすとともに、全国の先進例から学び、有機・無農薬栽培の農産物を市内の学校給食でも提供できるようにしていきたいものです。